—(偕楽園)—

咲きかおる
水戸の梅

糸のような春雨と共に寒さも日一日と和らぎ、暖かい春の日差しが若人の青春を呼びさますようになると、百花に先がけて梅がほころび初める。あの清そな趣と芳香をもつた高雅さは、他の花の遠く及ばないところである。古来梅の花言葉は高潔となつており、大変尊ばれている。きびしい寒気と風雪にもよく耐えながら、春を待つ梅樹は実に強じんである。

梅の名所で知られている水戸の偕楽園は、今や遠近からの観梅客で毎日にぎわつている。ゆい緒ある古園に咲きかおる数十種、数千本の老梅はいよいよゆかしく、その風雅な趣はますます懐古の情を深めてくれる。ことに朝霧に包まれた静かな梅林から、春を告げる鶯の声を耳にすると、何の苦悩も、屈托も消えて、心の奥底からき麗に洗い清められるような心境になる。

水戸の梅林は、水戸九代の藩主徳川斉昭が一般庶民と楽しみを共にするために、天保12、13年（114年前）にかけて作つた偕楽園（約40,000坪）や弘道館付近（約10,000坪）へ、江戸小石川の水戸邸から梅の種子を取りよせて、大規模に栽培したものである。又この梅の実は軍用の副食に用いたとも伝えられている。

徳川斉昭は特に梅を愛賞し、梅にちなんだ歌と沢山読まれているが、その内、代表的なものを挙げて見よう。

「国民とともに楽しむ心かな
今を昔としのぶ世までも」

「葦原の瑞穂の国の外までも
薫りつたえよ園の梅が香」

又明治の俳聖正岡子規は偕楽園南崖に咲く梅を眺めて「崖急に梅ことごとく斜なり」と作句している。そもそも梅はバラ科に属し、その原産は中央アジアで、日本には奈良朝前後に中国から来たものと思われる。万葉集にも梅の歌は 119首も読まれており、柿本人麿作「梅の花咲ければ周辺に家居れば乏しくもあらず鶯の声」がその元祖といわれている。

なお梅の種類も多く色だけでも紅、白、淡紅、黄色などがあり、本県内の梅樹は散在、集団のものを合わせて約18万本位（全国の推計数約450万本）あるものと思われる。